

乳児における姿勢運動発達と言語発達

—— 飛行機ポーズの検証 ——

Postural-motor development and language development in infancy

—— The study of glider-posture ——

矢 野 の り 子

キーワード：activity, things-of-action, objects-of-comtemplation, joint attention,
sensori-motor-intelligence

要 旨

本論では、生後4ヵ月から7ヵ月という目的志向的、意図的な移動への時期にあらわれる飛行機ポーズに焦点をあてた。この時期に特徴的にあらわれ、次の時期の姿勢運動へと必ずしもつながらないように思われる飛行機ポーズについて、ひとりの男児の事例を中心に検討した。目的に向かう活動や移動を中断して飛行機ポーズをとることは、一見課題解決のための活動を中断しているようにみえる。本論では、飛行機ポーズにともなう2つの特筆すべき様相である、喜びの情動の高まりと飛行機ポーズでの対象への凝視から発達における飛行機ポーズのダイナミズムを検討した。飛行機ポーズにより対象と距離をとりかつ凝視するという活動は、興味あるものに「まなざしを投げかけ」、事物を「静観対象」としていく。この活動は、イメージの形成と象徴機能形成の契機になっていくように思われる。さらには、情動共有を基盤として、母親を代表とする基本的信頼関係を抱く他者とそして対象の三項関係を築いていく契機にもなる。このことが、やがて三項関係における指さしを誘発し、意味語へと繋がっていくのだと思われる。飛行機ポーズには姿勢運動機能と情動機能と認知機能の発達連関がみられることを検証した。

はじめに

子どもの発達研究においては、認知機能の発達にくらべて姿勢運動の発達が取り上げられることは少ないように思われる。また、両者の関係が取り上げられたとしても、姿勢運動機能は認知機能の発達の土台を用意するものと位置づけられることが多い。さらに、姿勢運動機能と情動機能のかかわりについてはほとんど触れられることがないように思われる。独立歩行が確立する1歳前後に象徴機能が獲得され言語を獲得していくこと、そして愛着対象を内的対象としてイメージしていくことは発達連関として重要な視点である。乳児期から幼児期初期においては、姿勢機能と認知機能そして情動機能の発達は密接にかかわっている。本論では、姿勢運動面の発達と心理面（精神面）の発達、とりわけ言語発達がどのようにかかわっているかをみ

ていきたい。

Wallon (1949, 1956) の精神発達理論は、内臓や姿勢の感覚を基底とする情動、情動の社会機能、発達過程における姿勢運動機能の重要性に注目している。Wallon は運動発達の一側面と考えられがちな姿勢機能が運動から分化し、全体として統合された身体イメージが形成されることと、象徴機能が形成されることには深い関係があると考ええる。さらに、姿勢の自己受容感覚が、人間的な同一性の基盤にあり、個人の実存に深く根ざしているとも指摘している。

本論では、生後4ヵ月から7ヵ月頃という乳児期の前半から後半にまたがる時期に観察される飛行機ポーズに焦点をあてて、姿勢運動の発達と心理面の発達のかかわりをみていく。

飛行機ポーズとは腹部を支点として頭から胸を上げ、上肢を飛行機の翼のように左右に開いて伸ばし、下肢を持ち上げて進展する姿勢である(図1、図2、図3)。この姿勢を保持するためには、首が座っていることが必要であり、伏臥位で過ごすことが多い月齢に特徴的な姿勢運動活動である。腹部を支点として、強く背屈して頭と上下肢を宙に持ち上げることになり、姿勢保持には強い緊張が伴う。それ故、疲れると突っ伏して休むという、姿勢保持と休憩が交替しながら反復される。飛行機ポーズは、定頸(首すわり)、寝返り、座位、這い這いを経て立位姿勢が始まるまでの時期に現われる。つまり意図的な移動への時期である4ヵ月から7ヵ月くらいにおいて現われる。Ajuriaguella (1980) によれば、飛行機ポーズは乳児の神経心理学的な発達(姿勢・緊張の発達、腹臥位における平衡の獲得、姿勢の交代、移動)の枠組みのなかに位置づけられるものである。また、この活動の誘発と鎮静の条件は、制約、快、受け身、意図性の間の機能のダイナミズムにかかわるといえる。

この時期、飛行機ポーズが反復して現われる子どもとほとんど飛行機ポーズがみられない子どもがいる。ここでは、生後4ヵ月から7ヵ月にわたって飛行機ポーズが頻発した、ひとりの男児(W児^{註1})の観察事例から、姿勢運動の発達と情動と言語発達の関連について見てみたい。

1. W児の姿勢運動の発達と飛行機ポーズ

まず、W児の姿勢運動発達の様子を概観すると表1のようになる。

W児は姿勢運動の発達はほぼ標準内のゆっくりめであった。定頸は3ヵ月の終わり、寝返りは4ヵ月なかばであり、寝返りを繰り返して移動することは5ヵ月に可能になった。7ヵ月にはずり這いで前進し、8ヵ月に座位が確立した。ずり這いから四つ這いまでに半月以上経て移動するようになった。9ヵ月なかばでつたい歩きするようになり、1歳2ヵ月で独立歩行が確立した。このW児に“飛行機ポーズ”ともいうべき独特の姿勢運動がみられた(表1参照)。その点を取りあげて考察する。

W児は、3ヵ月ころから入浴後に服を着せるとき、頭を後ろにそらせて身体を弓なりにそりくりかえらせるようになった。4ヵ月8日に、はじめて仰向けからうつぶせに、5ヵ月1日には腹ばいから仰向けに寝返るようになった。その後寝返りを繰り返すことで、ころがって移動

表1 W児の言語発達と姿勢・運動の発達

| 月 齢 | 言語（音声と意味）の発達 | 姿勢・運動の発達 |
|-------|--|--|
| 1ヵ月 | クーイング（声を出して喜ぶ、声を出しての応答・ターンテーキング） | 定頸 |
| 2ヵ月 | | |
| 3ヵ月 | | |
| 4ヵ月 | | |
| 5ヵ月 | 発声盛んになる。母音の喃語（意図的発声、行動に伴った発声、やったことの確認の発声） | 仰向けからうつぶせに寝返り うつぶせから仰向けに寝返り 寝返りで移動 |
| 6ヵ月 | | |
| 7ヵ月 | 基準の喃語（ひとり言、呼びかけ） | ずり這い |
| 8ヵ月 | 三項関係、共同注視のなかでの指さしを伴った発声 単純な発声模倣、有意味語の出現「マンマ」「ネンネ」 | 座位確立 |
| 9ヵ月 | | つたい歩き |
| 10ヵ月 | | |
| 11ヵ月 | 自発的有意味語の増加 | 独立歩行 |
| 1歳 | | |
| 1歳1ヵ月 | | |
| 1歳2ヵ月 | | |
| 1歳3ヵ月 | | |

飛行機ポーズ



できるようになった。寝返りと頭の保持ができるようになり、何か興味をひいたのがあると、寝返りながらそばまで移動していくようになった。

【観察W】(0:5,9) お腹を軸にして、身体の向きを変えて、寝返りながらベッドの下まで移動し、授乳のとき使用する脱脂綿の小さな容器をつかんで振った。

【観察W】(0:5,14) 寝返りしながらふすままで行き、そこに貼ってあった絵の端をつかんで破る。

ここでは、容器や絵を見つけて近づいていったというより、姿勢を変え移動運動しているうちにたまたま目にしたものに興味をもち、さらに移動していき、対象物を手にとったのであった。この段階で、W児は興味のあるものに到達して、手にしたときすぐに口に入れずにつかんで振ったり、破ったりした。

やがて5ヵ月の後半から、下半身や腕を使って這うことに努力するようになった。はじめは頭を床に押しつけて臀部をあげ山形になるだけだったが、その後、尺取虫のように前進することができるようになる。このことにより前方の興味ある対象物に近づいていく行動になって

いった。

【観察W】(0:5,16) 尺取虫の格好で足をつっぱって前進し、ベッドの下の脱脂綿容器のあるところに行く。

【観察W】(0:5,20) ガラガラを30cmくらい前方に置くと、一生懸命尺取虫で前進し、うまくつかむ。

【観察W】(0:5,27) ふとんの上にあった絵本をとろうとして、足でふとんを前後に突いて（尺取虫にならずに）前進し、はじめて這うのに成功する。

【観察W】(0:5,28) 腰を左右前後に振って前後させる動作をしきりとする。その日の午後、絵本を見つけ、腰を振っているうちに前進でき、何度か繰り返して絵本に到着する。

【観察W】(0:5,29) 腰を振っての全身が上手になり、部屋中動きまわって、興味のあるベッドの下の脱脂綿の容器、絵本、新聞などに向かって突進する。

【観察W】(0:5,30) 腕で身体をひきずって（いわゆるずり這い）前進する。

6ヵ月に入ると、這って移動し、好奇心のおもむくままに部屋中を探索しまわるようになり、手にした物を口に入れるようになる。新聞紙や絵本やティッシュペーパーの箱、障子などの紙のものが特に好きであり、すぐ触りに行って、破ったり口に入れたりする。扇風機、電気コード、スリッパや玄関の履物も好きだった。

7ヵ月に入ると、数秒間お座りが出来るようになった。しかし、座位が安定し、お座りして両手でおもちゃを取り扱うようになるのは8ヵ月の半ば以降になる。また、7ヵ月から8ヵ月にかけてのころから徐々に四つ這いとなって移動するようになり、行動範囲が広がった。

飛行機ポーズが頻出したのは、上記に述べた姿勢の変換と移動ができるようになった時期のことである。飛行機ポーズとは、腹ばいになってそりかえり腕と両足を挙げて前後にヒラヒラさせるものである。この行動は、母親を見たり、何か興味のあるものを見つけたときに出現した。即ち注視行為と連動して飛行機ポーズがあらわれたのである。

最初にその徴候が見られたのは、腹ばいから仰向けに寝返ることが出来た5ヵ月1日、少し前方にあるものに手を伸ばしてつかもうとしたときである。W児は、注視してつかもうとしたとき手足をばたつかせた。この動作が飛行機ポーズの前兆であった。

【観察W】(0:5,1) コンビラックに座らせて、これまでより少し身体を起こした角度に変えてやり、ラックの前に食卓をつける。三角のガラガラをその食卓の手の届かない所においてやると、それを見て手足をバタバタさせる。傾斜した食卓の上をガラガラが少しすべってW児のほうに近づくと、身体を垂直に起こして左手を伸ばしてガラガラをつかむ。口に入れて遊ぶが、しばらくするとまた食卓の上にはうり出してしまう。また、同じように手足をバタバタさせてから、身体を起こして左手でガラガラをつかむ。

【観察W】(0:5,11) Y児（兄）が腹ばいになって本を読んでいるそばで、W児も腹ばいになっている。母が見ているのに気づき、顔を見て飛行機ポーズをしてにっこり笑う。

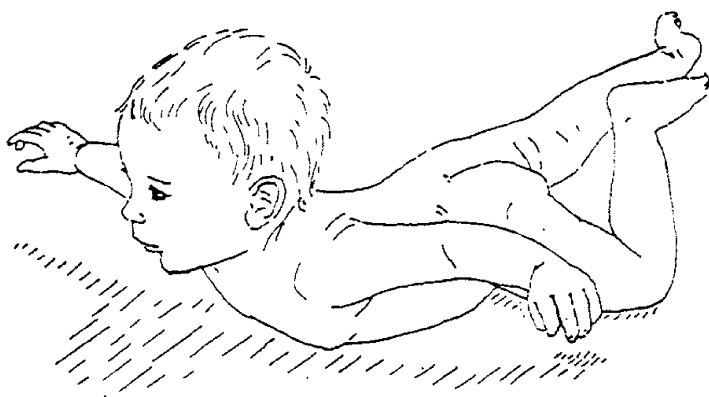


図1：飛行機ポーズ（S児《男児》5カ月） Ajuriaguerra, J. et Auzias, M より



図2：飛行機ポーズ（M児《女児》9カ月） Ajuriaguerra, J. et Auzias, M より



図3：飛行機ポーズ（J児《女児》6カ月） Ajuriaguerra, J. et Auzias, M より

【観察W】(0:5,15) 兄のY児がボードゲームのコマを並べている。腹ばい姿勢でそれを見たW児は、飛行機ポーズをして喜ぶ。

【観察W】(0:5,18) 母親が「バア」と顔をのぞかせると、にっこり笑い飛行機ポーズをして喜びをあらわす。

5ヵ月後半からW児は、それまでの寝返りによる移動ではなく、尺取虫のような格好で、さらに腕で引きずる、ずり這いで目的の事物まで前進できるようになっていった。

【観察W】(0:6,0) 畳の上にある新聞紙を見つけ、ずり這いで進む。途中飛行機ポーズをして「アッ、アー」と嬉しそうに笑う。また前進して新聞紙を手にして音をさせて喜ぶ。

【観察W】(0:6,1) 母がアルバムを見ようと、アルバムの入っている開き戸を開けると、開く音がするのと同時にふり返り、這ってくる。「Wくん」と母が声をかけると、止まってにっこり笑う。また前進するが、途中止まって飛行機ポーズをして喜ぶ。「アー」と声を出す。その後また這って前進し、アルバムのところに来てしきりに触る。

この後も飛行機ポーズは頻発したが、8ヵ月になり、四つ這いと座位が確立すると同時に消失した。飛行機ポーズは、上述したように興味を引いたものを見つけたとき、あるいは興味をひいた対象に向かっていくときにあらわれた。まず目を輝かせて両手両足を挙げ、飛行機のような格好で手足を振って喜ぶ。また、這っていく途中でも2、3度止まって飛行機ポーズをし、また前進して目標に到達する。はじめはこの行動ができること自体が喜びであったが、やがて喜びの表出行動になっていく。それはまるで嬉しくてたまらないといった様子であった。あるいは興味のある対象を見つけた喜びの情動を自分のなかに溜めて、感情を持続させ（あるいは増幅させ）、前進のエネルギーにしているかのようでもあった。飛行ポーズと認知機能そして情動や社会的機能が連動するようになったのである。

2. Ajuriaguerra の先行研究

Ajuriaguerra (1980) は、この飛行機ポーズ（グライダー運動）に注目している。乳児で、腹臥位でおかれたときに、3ヵ月から10ヵ月の間に現れる。意図的な移動への移行の時期としての生後1年の発達の過程における姿勢・運動活動に焦点を当てている。

飛行機ポーズは、とくに4ヵ月から7ヵ月において、ある子どもでは非常に反復的なものとなる。飛行機運動は、乳児の神経心理的な発達（姿勢・緊張の発達、腹臥位における平衡の獲得、姿勢の交代、移動）の枠組みのなかに位置づけられ、この運動の誘発と鎮静の条件は、制約、快、受身、意図性の間の機能のダイナミズムにかかわっているという。

また Ajuriaguerra によれば、自発的な運動が少なく緊張・運動経験が少ない子どもは、自己の身体感覚を自ら豊かにするために飛行機運動をより多くすることによって、それを補い、座位や立位がとれるようになるとその必要がなくなるので消失するという。

飛行機運動は、はっきりとした覚醒の状態で引き起こされる。そして、子どもと母親との何

らかの遊びを引き起こす気分の高揚を引き起こす。Ajuriaguerra はその報告として、母親が保育園に迎えに来て近づくと、飛行機運動を引き起こし、興奮に打ち震え、微笑と呼びかけの発声を伴い母親をつよく見つめるという例をあげている。また、とくにこの運動を引き起こす状況として、子どもがとりたいたいと思っているおもちゃが遠くにあるのを見つけたときをあげている。飛行機運動をしながら視線はたえず気に入ったものを見ている。乳児が渴望している事物は、ある姿勢をとらせ、その方向に向かった（移動がまだ十分ではないので、達成されない手段ではあるが）手段をとらせる。「大きく動いているようで動けない状態で」飛行機運動が繰り返して誘発される（Ajuriaguerra 前掲書、pp497-pp498）。

また Ajuriaguerra は次のようにいう。「子どもに属していない、視線でしか自分のものにできないこの世界が、移動によってその距離がなくなるときには、自分の身で探索する事物を選択することを可能にするひとつの世界を生み出す。引きつけるような視線、あるいは方向付け、あるいは熟視から、子どもが触って操作し、動かし、自分に所属し、新しい万能感と個性の世界で体験することを介して、視覚的にも触覚的にも取って所有することへ変化する（Ajuriaguerra 前掲書、pp500）。

Ajuriaguerra が指摘するように、自発的な運動が少なく、緊張・運動経験が少ない子どもは、自己の身体感覚を自ら豊かにするために飛行機運動をすることによって、それを補っているように思われる。W児は、自発運動が少なく、筋緊張がゆるやかであった。また、姿勢運動面の発達が遅めであった。乳児期、活動水準は低く、全身運動で興味あるものに手をのばし探索するより、追視し、凝視して視覚的に事物をとらえることが多かった。Ajuriaguerra もいうように、視線でしか自分のものにできない世界がある。しかし、そこには視覚的に事物をとらえ、早くから自分と対象の距離をとることで世界をとらえる姿勢があったともいえる。W児は興味のある事物に向かっていくとき、何度か飛行機ポーズをするのであるが、そのとき、2つの特筆すべき様相をしめした。第一は喜びの情動の高まりであり、第二には飛行機ポーズでの対象（物であれ人であれ）への凝視である。

対象物への距離と注視は、象徴機能形成の基盤をなすと思われる。自分と距離をもつ「自分とは別のあるもの」をとらえることであるからである。そこには表象（イメージ）の芽生えも感じとれる。また、指さしはまだ出現しないものの、飛行機ポーズの際、W児は興味ある対象物を凝視しつつ、しばしば母親のほうをみて発声している。誰かと何かを共有する伝達機能にないつつあるかのようでもあった。三項関係の構えをとるようになっていたのである。

3. 飛行機ポーズと静観対象

対象物をしばらく（飛行機ポーズをとっている間）凝視するという点について興味深い論点がある。Werner&Kaplan（1963/1974）は、行動物（thing of action）から静観対象（object of contemplation）への変化を象徴機能形成の基礎とする。凝視することは、距離をへだてた、対象

への間接的な働きかけとしての静観的認識の発達の一部と考えられる。

Werner&Kaplan は、〈事物に働きかけたり、事物をもちいて活動すること〉と〈事物を静観すること〉とを区別する。そして、シンボル活動に参入してくる対象は静観対象でなければならない。主体が直接的にそれに対して単に働きかけるという意味での事物ではなくて、主体が《まなざしを投げかける》対象でなければならない。行動物においては、物と生体の距離は小さく（いわば融合しており）、物は生体の対象物（object）として外在するのではなく、生体の活動が行われるその全体状況のなかにはめ込まれて、生体の活動の一環をなしている。静観対象は、Werner のいう知（knowing）の対象であるのに対して、行動物は活動をうける（acted upon）物、生体の一定の活動を触発すべき信号化（signaled）物である。生体—物を結ぶ実践的活動の環から一步退いて、〈眺める〉（contemplation）という直接的には実践活動にかかわらない態度をとるとき、この対象を静観対象という。Werner&Kaplan は、静観的態度の出現にともなって、基本的な対象指向性がたちあらわれてくるとする。

上述の飛行機ポーズが頻繁に見られるのと並行してW児には、意図的行動がみられた。行為と結果の結びつきを期待し、反復再生する意図的行動がみられたのである。5ヵ月19日のとき、母がガラガラを小さな箱に入れて振ってみせてそれを渡すと、手を伸ばしてガラガラを取るが口には入れず、また箱の中に入れてそれをもったままそこで振った。その後ガラガラで箱をたたいたり、口に入れたりしていたが、しばらくして箱を見つけると、また箱のなかで振った。6ヵ月1日のときには、ベッドの上にあった空き箱を手でずらして、柵の間から床に落とした。箱が落ちるとW児は下をのぞいた。母が空き箱をとってやるとまたずらしながら柵の間から落とした。これを3度繰り返して、そのとき母の顔を見て微笑した。そのころからものを落として遊ぶようになった。6ヵ月29日、7ヵ月1日には椅子に座ってわざとプラスチックの皿を床に落とし、のぞきこんだ。その後、母の方を見て笑い「アー」と声を出した。

7ヵ月に入ると、自分の行為の結果をみて、「アー」とか「アッ」とか発声することに指さしに伴うようになった（7ヵ月7日、7ヵ月14日、16日等）。指さし行動が出てくるとはシンボルの形成にとって重要である。指示するもの（指先）と、それによって指示されるもの（物）からなる意味関係が成り立つからである。そこに声が伴うようになることは、ことばへと繋がるであろう。この指さし行動の出現の前にまなざしによる対象志向性がみられたのである。事物が行動物としてではなく、静観対象になっていくことと、その事物についての表象が子どもの内部にできていくことは深くかかわっていると思われる。その物への直接的な動作が外的には抑止されて、内的反応として形成されていくことだからである。

前節で、W児が興味のある事物に向かっていくとき、何度か飛行機ポーズをするのであるが、そのとき、2つの特筆すべき様相をしめしたと述べた。第一は喜びの情動の高まりであり、第二には飛行機ポーズでの対象（物であれ人であれ）への凝視である。Ajuriaguerra にも、母親が保育園に迎えに来て近づくと、飛行機ポーズを引き起こし、興奮に打ち震え、微笑と呼びかけ

の発声を伴い母親をつよく見つめるという報告があった。ここにみられるのは情動の高まりによる飛行機ポーズによって、対象に近づきたいのに近づけない状態である。このことが、「行かないでここにとどまって見つめる〈眺める〉」という直接的には実践活動にかかわらない態度をとり、その対象を静観対象にしていく様子がうかがえる。このように、飛行機ポーズは事物が行動物から静観対象になっていくひとつの契機とみなせる。

4. 飛行機ポーズとW児の音声の発達と意味化過程の特徴

ここで、改めてW児の言語発達を概観しておく（表1参照）。語彙が出現する前の三項関係を見ておく。W児は、共同注視のなかで指さしをともなった発声が早くにみられた。9ヵ月の半ばから、“やり——もらい”関係のなかでの意味をともなった発声がみられる。

【観察W】(0:9,13) 母親が「ちょうだい」というと、おもちゃを渡して「アー」という。もらった時も「アー」という。

また、次の観察例以降、三項関係における共同注視のなかでの指さしをともなった発声が頻発してくる。

【観察W】(0:9,14) 遊んでいる時、兄が外から帰って来たのに気づき、母親のほうを見てから兄を指さし「アー」という。

【観察W】(0:10,2) 兄が風船をロケットのように飛ばしているのを見て、指さしながら手を上下させて「イエーイエー」と喜ぶ。

【観察W】(0:10,9) 母に抱かれて外に出た時、空を指さして「アッ」。菊の花を指さして「アッ」という。その後母の顔を見る。

分節化した音声をともなえば、すぐにでも対象語になりそうであった。

W児は、有意味語の獲得が早く、一語文での命名、叙述、要求を示した後で統語機能を獲得していった。W児は一語ずつの音声模倣が早くかつ頻繁にみられた。母親の発話の口元をみることも盛んであった。W児は、むしろ音韻のレパートリーが限られていて、有意味語獲得期において多くの同音異義語を発している。それらの同音異義語を対話構造の中で、意味内容特定する語彙へと形成させていった。一語文から統語機能をもそなえた発話全体を形成させていったW児のことばの場が対人関係にあったことは無論である。

W児の音声の意味化過程と語彙発達をみていくと、母親（養育者）との相互関係のなかで着実に語彙（記号的意味）を獲得していったといえる。6ヵ月頃から機嫌のいい（生理的、心理的に快の状態の）とき、自発的な喃語発声がみられた。やがてこれらは自分の行為の結果をみての発声にもなった。そうしたとき、母親がW児の発声をなぞり、応答していくことで、発声そのものに意味が付与されてくるようになった。7ヵ月ころからは、行動にともなった、また母親に向かって注意とか呼びかけの喃語発声が頻繁にみられた。W児の場合、他者との三項関係における指さしをともなった発声が9ヵ月の早くからみられた。岡本（1982）は初語形成

を三群に区別している。

- ①「喃語として自発発声したものが意味化し、そののち模倣的に発声できるようになるもの」
(10ヵ月ころまで)
- ②「模倣的に発声して何かを指すところから出発して、のちに自発的に使えるようになるもの」
(10ヵ月ころから1歳2ヵ月まで)
- ③「模倣的に発声して何かを指すと同時に、それを自発的にも発声使用できるようになるもの」
(1歳2ヵ月から)

浜田(1995)はこの三群について、①を初語形成の典型とし、③を語彙拡張とし、②をその中間的な過渡形態とみなしている。W児の場合、①→②→③の典型的な経過をたどったといえる。浜田はまた、②の時期に語彙獲得についての重要な転換点をみている。W児にみられるようにこの時期、共同注視が確実になり、三項関係のなかでの指さしをともなった喃語発声が盛んになる。その後、③の時期に同音異義語と意味の般化が多く発声されながら、急速な有意味語獲得がなされていった。W児の場合は、①→②→③の経過のうち、②の時期が短期間でかつ語彙獲得の転換をみた。

有意味語発達の初期、W児のことばのかなりのものが同音異義語であった。W児の語彙獲得においては、少ない音声のレパートリーでいくつかのことばを兼ね、ひとつ、あるいはそれに近い音声がいくつかの意味に般化された。W児の場合は、表象がまずあってそれに音声がついていくかのように、一語一語確実に有意味語を獲得していったのである。

1歳2ヵ月以降、W児は語彙の爆発的増加と有意味語優勢の発話が出現し、二語文を獲得していく。そして、1歳9ヵ月には多語文が優勢な発話となった。

5. 姿勢運動の発達と静観対象の形成および言語機能の発達

先述したように、Werner&Kaplan は行動物から静観対象への変化を象徴機能形成の基礎とする。W児の兄(Y児^{註2)})は、姿勢運動の発達が早く、動くことによって自己表現する運動優位の子どもであった。Y児は、興味のあるものを眺める間もなく、事物に働きかけたり、事物をもちいて活動することができた。それゆえ事物と距離をおいて眺める《まなごしを投げかける》間がなかったといってもよいかもしれない。筋緊張の高さと運動優位ゆえに、自分で目的にすばやく到着できた(してしまった)のである。また、他者に働きかける必要がなく、容易に自分で接近しえたのである。自己と事物との距離がとれず、事物が静観対象になる機会が少なかったのだともいえる。当然三項関係のなかで、共同注視する指さしの出現も遅かった。

W児は、三項関係のなか、共同注視を伴いつつ指さしをしての発声が9ヵ月はじめには出現している。一方、Y児は自発的な指さしが9ヵ月なかばにみられたが、三項関係のなかでの指さしを伴っての発声のはじまったのは10ヵ月で、そのときすでに自立歩行が確立していた。自分と対象の距離をとることで世界をとらえていくより、声をも伴って行動化し、事物と自分と

の距離をなくしてしまい、直接体験していたのだといえる。凝視し、距離をおくことによって表象を立ち上げることが遅れたのであろう。

W児は、姿勢運動の発達が遅く移動が可能になるのが遅れた。筋緊張はゆるやかで、活動水準は低かった。乳児期からW児は事物を凝視し、また追視が盛んであった。寝返りが出来た時期から、座位と四つ這いにより姿勢の変換と移動が可能になるまでの長い時期にわたって飛行機ポーズが頻出した。Ajuriaguerra (1980) によれば、自発的な運動が少なく、筋緊張経験の少ない子どもは自己の身体感覚を自ら豊かにするために飛行機ポーズによってそれを補っているという。W児は対象になかなか到達できず、また飛行機ポーズの出現により到達しないでながめることが生じた。W児は興味あるものに向かっていくとき、何度か飛行機ポーズをするのであるが、そのとき2つの特筆すべき様相を示す。第一は喜びの情動の高まりであり、第二は飛行機ポーズでの対象（物であれ人であれ）への凝視である。さらに飛行機ポーズで対象と母親を交互にみるという三項関係の出現が指さしより以前にみられた。対象への距離と凝視は、イメージの形成と象徴機能形成の基盤をなすと思われる。飛行機ポーズというかたちで、興味あるものに《まなざしを投げかけ》、事物を早くに「静観対象」としたのである。

以上述べてきたように、W児は早くからまなざしによって事物をとらえていくところがあった。それゆえ、飛行機ポーズというかたちで、興味あるものを静観対象とし、周囲の人と三項関係を結ぶことによって、早くにことばが象徴的な意味をもつ限定された記号的意味世界へ参入することができたのだと思われる。W児の語彙獲得とその後の記号的言語の獲得は大変早かった。W児は意味内容を特定するコミュニケーションの世界へ早くに参入したといえる。声でのコミュニケーションの時期を早くに越えて、弁別的なコミュニケーションによるやりとりが早くにできたのである。

W児の場合、三項関係を築く時期に飛行機ポーズがあらわれることにより、対象に《到達しないのみ》ことが生じた。そして、周囲の人と三項関係を結ぶことによって、ことばが象徴的な意味をもつ限定された記号的意味世界へ参入することが出来た。乳幼児期を通して、W児は早くから「飛ぶ前に見ていた」ように思われる。W児はことばによって自己表現し、コミュニケーションをとっていったのである。

おわりに

本論では、生後4ヵ月から7ヵ月という目的志向的、意図的な移動への時期にあらわれる飛行機ポーズに焦点をあてた。この時期に特徴的にあらわれ、次の時期の姿勢運動へと必ずしもつながらないように思われる飛行機ポーズについて、ひとりの男児の事例を中心に検証した。目的に向かう活動や移動を中断して飛行機ポーズをとることは、一見課題解決のための活動を中断しているようにみえる。しかし、飛行機ポーズにより対象と距離をとりかつ凝視するという活動は、興味あるものに《まなざしを投げかけ》、事物を「静観対象」としていく。そのこ

とが、イメージの形成と象徴機能形成の契機になっていくように思われる。さらには、母親を代表とする基本的信頼関係を抱く他者（それはコミュニケーションの絆 “bond” でもあるのだが）とそして対象の三項関係を築いていく契機にもなった。このことが、やがて三項関係における指さしを誘発し、有意味語へと繋がっていくのだと思われる。

以上、飛行機ポーズには姿勢運動機能と情動機能と認知機能の発達連関がみられることを検証した。このようなかたちで言語発達と姿勢運動発達、そして情動の発達の関連をみた先行研究はなく、今後さらに多数の事例に基づいて検証できるかどうかが目される。

註1、註2：W児とY児は成人に達しており、事例提供について本人の了解を得ている。

文献

- Ajuriaguerra, J. et Auzias, M. (1980): Comportement posturo – cinetique au cours de la periode pre-locomotrice chez le nourrisson. *Psychiatrie de l'enfant*, 23, 461-506.
- 浜田寿美男 (1995): 意味から言葉へ. 京都、ミネルヴァ書房.
- 小椋たみ子 (1999): 初期言語発達と認知発達の関係. 東京、風間書房.
- 岡本夏木 (1982): 子どもとことば. 岩波新書. 東京、岩波書店.
- Wallon, H. (1949): Les origins du caractère chez l'enfant – Les preludes du sentiment de personalite. Press Universitaire de France. (久保田正人訳 (1965): 児童における性格の起源. 東京、明治図書).
- Wallon, H. (1983): 身体・自我・社会. (浜田寿美男訳編). 京都、ミネルヴァ書房 (Wallon, H. (原著刊行年. 1956)).
- Werner, H. & Kaplan, B. (1963): Symbol formation. New York, International Universities Press, Inc. (柿崎祐一監訳 鯨岡峻・浜田寿美男訳 (1974) シンボルの形成. ミネルヴァ書房).
- 矢野のり子 (2009): 初期言語発達における声と意味——ジャルゴンとひとり言—— 奈良女子大学文化研究学科社会生活環境学博士後期課程修了論文.